

テストの呪縛

松浦 純子

「また、テストですね。この前終わったばかりだと思ったのに」
一年中テストに追い駆けられている気がする。自分が生徒の時も、テストが無ければいいなと思った。しかし、教員になって考えてみると、テストに対する選択権は生徒にはあるが、教員にはない。教員はとにかく作らなくてはいけない。

例年、高校三年生の授業二つと二年生の授業一つを受け持っているので、テスト作成もその数だけある。一学期の中間テストは五月、期末テストは七月、二期の中間テストは十月、期末テスト・高三の卒業テストは十二月、そして学年末テストは三月。この様なペースで定期テストがある。それだけではない。例年夏休み明けにテストを実施している。これをやらないと恐ろしいことに、多くの生徒が苦手なイスラーム史と中国史が二期期の中間テストの範囲になってしまう。

因みに来週から始まる三つのテストの文字数を数えてみた。6015+502+6039で合計は17,065文字である。書こう会の八〇〇字なら二十一回分。テストがあるごとに二十一回分も作問しているのだ。それが一年に五〜六回ともなれば、決して少なくない。一つテストが終わるとすぐに次のテスト問題を考え始めるという慌ただしさ。

最近では国語や英語は教科書の本文が入ったソフトがあり、先生たちはこれを利用して。当然のことだ。数学や理科は生徒に書かせることが多いので、問題用紙にはわりと白い部分が多い。社会にも教科書の本文が入ったソフトがあるようだが、私は使ったことがない。単純計算で毎回教科書の五十ページ以上がテスト範囲になるので、濃い内容の問題を作ろうと思えば、暗記問題ばかりの教科書ソフトの問題は絶対に避けたい。覚えてきた知識を使って考えさせる問題も入りたいのだ。いつもこのように考えているので、自分で自分の首を絞めてしまう。テスト問題は先生の授業に対する姿勢を示しているというのが私の信念だ。

無限のスパイラルから抜け出せずに三十年が過ぎてしまった。